

高津時代に思いをはせる。

2025-10-5 野口幹夫

たまたま息子が審査員を務めたご縁で「知の甲子園」(9/28 午後テレビ朝日)という番組を見た。全国の高校に呼びかけて、1年かけて、さまざまなクラブ活動の研究成果を集めて、その成果を競うのだ。予備審査を経て、最終的に残った3校の研究発表と審査が放送されていた。

高校野球の全国大会と比較して

「知の甲子園」と名付けられているのだ。

2025 年の今年最終段階に残っ



たのは3校、9分のプレゼンテーションと専門学者からの質疑応答の結果、最優秀賞が贈られたのは、青森の名久井農業高校の農学研究部4名のグループが「農薬の散布公害を減らすため、発泡剤と結合させた泡散布システムを開発した」にだった。2位は東京立川高校天文部の「流れ星の観測システムの開発と成果」であった。

審査と討論にはその道の専門家が出ておられて、それぞれが世界的な研究レベルであることを論述しておられた。そしてその成果は直ちに世界へ良い影響を

与えるものであることも論及されていた。

見ていて今の彼ら高校生のレベルの高さと強い情熱に驚愕した。先生のレベルを超えるところではない、世界の権威のレベルを超えるのである。我々の時代とは違うなと思った。

話は変わるが今、夜 11 時台の NHK 連続テレビドラマで「いつか無重力の世界へ」をやっている。ご覧になっている方もおられるかもしれない。

それは、さる女子高校の天文部で 4 人の仲良し部員がいて、熱心に天体観測などやっ



るうちに、将来は宇宙飛行士になる夢を分かち合っていた。その夢は果たせぬまま卒業していまは 10 年、ビジネスウーマンや、子育て家庭にいる人もいるが、今もその当時の仲間が友達でいた。

ある時その中から、その仲間が独自の人工衛星を作り、打ち上げて地球観測をするという夢をつくりあげて、皆と共有するのだ。今、まだそのドラマは終わっていないくて、苦戦しながらも、少しずつ夢に向かって活動をしている状況だ。私的な人工衛星など、かつては突拍子もない夢だったが、今の時代このドラマの上で実現するのかもしれない。

たまたまこのような高校時代を注目させられたので、我が高津時代を振り返りたくなった。我々の高津、目立ったのは野球部、絵画部、山岳部、などであったが、活動家が世界に羽ばたかれたのは卒業後のことであった。



自分も新聞部で活動し、卒業までに高津新聞を 10 刊ほどは刊行した。平和運動の喚起につとめ、ある時には、村尾行一と学校を抜け出して京大事件（天皇の訪問に学生が平和の歌を歌って迎えた）に参加し、特集報道した。その刊は発送停止処分を受けたが、それ以上のお咎めはなかった。自分の中でこの時鍛えられた新聞記者魂が健在だと思う。それが高津 5 期ホームページの編集掲載を引き受けたことや、いま 60 回目を迎えた KOZOOM サロン 28 の案内をさせていただいていることに現われている、KOZOOM サロンの共同呼びかけ人が、かつての高津新聞部の同僚石原靖造氏であることもそのご縁だ。

90 歳を迎えた同窓会をいまだにインターネットの空間で毎月開催しているというのは「知の甲子園」ならぬ「老の甲子園」の記録かもしれない。そんな自己賞賛の気持ちでももってお互いがんばっていきましょう。